

# 流通の課題

①

「みんなで畳を敷き終えると、誰かれとなく大の字に寝転んだり、ほおずりしたり。『気持ちいい』って声が上がりました」

3月11日の東日本大震災で甚大な被害に遭った宮城県石巻市。震災直後、800人が避難した鹿妻小体育館で、避難所内の意見の取りまとめや渉外を担当した浅野仁美さん(50)が当時を振り返る。

避難所に八代市や水川町、JAやつしろなどから半畳の畳き畳1千枚が届いたのは4月末。福島和敏・八代市長や歌手の八代亜紀さんも駆けつけた。

鹿妻小は海からわずか1kmの所にある。「外はがれきりが広がり、体育館の中も重油やガソリン、ヘドロの臭いが充満。お風

## 岐路に立つイ草

第2部

呂も満足に入れない日々だった。真夏に訪れた鹿妻小体育館の空気は予想外にひんやりと、浅野さん。一届いた畳からすこく良いイ草の匂いがした。浅野さんは言う。「畳は生きた。暑い時は冷やしてくれ、寒い時は温めてくれる。湿度もあってカビが生え、掃除気もとカビが生え、掃除

熱中症患者が出る避難所もある。除けなさいと教えてくれます」

## 避難所



八代市と水川町が送った1千枚の半畳畳が敷き詰められた鹿妻小体育館の避難所＝7月27日、宮城県石巻市

# 被災者喜ばせた畳の香り

畳にはイ草の香りによるアロマセラピー効果や保温・断熱、湿度調節のほか、空気の浄化作用もあるといわれる。半畳畳が届く前の避難所の床はスポンジ状のマットが敷かれていた。ヘドロの粉じんが多く、消灯後、あちこちでせきをす音が続いてきたが、畳が入った夜から激減したという。

避難所から歩いて10分ほどの所に自宅があった阿部ともえさん(72)は「涼しくて座り心地も良くて最高。やっぱり日本人には畳だよ。流された家の五つの部屋も全部畳だった」。夫の節郎さん(71)も「スポンジの上に寝ていた時に比べ、こんな幸せなことはない。もう一度家を建てたら絶対、畳の部屋にする」と笑った。

石巻市に隣接する東松島市の月浜地区は、漁協のノリ集荷場が避難所だった。地震で地盤沈

下し、満潮時は海水が床下までくるともある。当初は床板の上に毛布やビニールのシートを敷いていた。

6月に市役所から八代の半畳畳120枚が届いた。支援物資の受け入れを担当した小野智恵美さん(47)は「タニガわき、カビが生えて不衛生だったのが改善された。この畳をそのまま仮設住宅に持っていけます」と笑顔を見せた。

◇(和田毅)

遠く離れた東北の被災地で、八代から届いた畳は人々の心と体を癒やしていた。畳需要が落ち込んだ大きな要因とされる「消費者の畳離れ」と、避難所に届いた畳を喜ぶ人々の表情とのギャップはどこからくるのか。「岐路に立つイ草」第2部は、産地と消費者をつなぐ流通について考える。